

中学生訪中親善使節団報告書

1992年3月27日～4月3日



財団
法人

Takamatsu International Association

高松市国際交流協会

次代の担い手による国際交流

財団法人高松市国際交流協会

理事長 三 野 博

近年、我が国の主として世界経済に占めるプレゼンスの増大に伴い、我が国は国の内外を問わずいわゆる「国際化」と向き合う状況となっており、これへの対応が求められるようになっております。

財団法人高松市国際交流協会は、市民と行政が一体となって高松市の国際交流を進めることを目的として、1990年8月高松市の出資により設立され、都市交流、交流活動支援、在住外国人支援、情報収集提供などのさまざまな事業を実施しておりますが、このたび派遣研修の一環として、市内の各中学校から生徒20人に御参加をいただき、中学生訪中親善使節団を高松市の友好都市である中国の南昌市をはじめ北京、上海へ8日間にわたり派遣いたしましたところ です。

申すまでもなく、我が国は先の大戦において中国に多大の損害を与えておりますが、この事実を踏まえ国交正常化20周年という記念すべき年を契機に、日中友好をさらに進展させることは、両国の発展、世界の平和にも大きな貢献を果たすものと存じております。

使節団は、いずれの都市においても熱烈な歓迎を受けるとともに、交流・交歓会や各地の視察見学等を通じて、現地中学生との友好親善と中国への理解を深めるなど、大きな成果をあげて全員無事に帰国いたしました。

中学生という感受性の豊かな時期に、国際感覚をかん養し、国際交流の役割と日中友好の大切さを肌で感得することは極めて意義深く、今回の派遣を通じて結ばれた中国の中学生との友情を今後ますます発展させるとともに、団員相互の交流を深め、次代における国際交流の推進に役立てていただきますことを希望してやまない次第であります。

最後に、中学生訪中親善使節団派遣事業の実施に際し、使節団の引率をいただきました団長の乙武洋一先生、中島宏晃先生、立道千津先生には、大変御苦勞をおかけいたしました。ここに心から謝意を表します。また、格別の御協力を賜りました高松市、高松市教育委員会ならびに中国日本友好協会、その他多くの関係者の皆様に対しまして、深く感謝を申し上げます。

目 次

1	中学生訪中親善使節団名簿	1
2	日 程	2
3	脇 信 男・高松市長メッセージ	3
4	使節団の活動状況	4
5	所 感 集	1 1

1 団員名簿

団 長	乙 武 洋 一	(男)	高松市教育委員会学校教育課指導係長
引率教員	中 島 宏 晃	(男)	高松市立下笠居中学校教諭
引率教員	立 道 千 津	(女)	高松市立城内中学校養護教諭
団 員	松 川 仁 司	(男)	高松市立桜町中学校
”	鈴 木 涼 子	(女)	高松市立紫雲中学校
”	林 涼 子	(女)	高松市立玉藻中学校
”	藤 本 洋 行	(男)	高松市立光洋中学校
”	石 丸 祐 子	(女)	高松市立城内中学校
”	中 西 祐一朗	(男)	高松市立鶴尾中学校
”	片 山 直 美	(女)	高松市立屋島中学校
”	堀 秀 成	(男)	高松市立協和中学校
”	川 西 亜矢子	(女)	高松市立龍雲中学校
”	平 尾 吉 徳	(男)	高松市立勝賀中学校
”	中 村 恭 子	(女)	高松市立一宮中学校
”	坂 田 美 鈴	(女)	高松市立香東中学校
”	溝 内 亮 三	(男)	高松市立下笠居中学校
”	福 井 大 和	(男)	高松市立男木中学校
”	畑 田 博 子	(女)	高松市立山田中学校
”	伊 丹 克	(男)	高松市立太田中学校
”	佐々木 健 介	(男)	高松市立古高松中学校
”	澤 山 未来子	(女)	高松市立木太中学校
”	篠 田 陽 子	(女)	香川大学教育学部附属高松中学校
”	松 下 麻 紀	(女)	香川県明善中学校



2 日 程

日次	月 日	時 間	交通機関	日 程
1	3 / 27 (金)	9 : 55 11 : 05 16 : 55 20 : 35	ANA - 632 CA - 930	高松発 羽田着 成田発 北京着 (北京泊)
2	3 / 28 (土)			北京視察見学 故宮博物院、万里の長城、明の十三陵 中国日本友好協会表敬訪問 (北京泊)
3	3 / 29 (日)	11 : 30 13 : 30	CA - 991	北京視察見学 天安門広場 北京発 上海着 上海視察見学 玉仏寺 上海市人民对外友好協会表敬訪問 (上海泊)
4	3 / 30 (月)	16 : 00	寝台特急	上海市向明中学訪問 上海視察見学 豫園 上海発 (車中泊)
5	3 / 31 (火)	8 : 48		南昌着 南昌市人民政府表敬訪問 南昌第一職業学校との交流・夕食会 (南昌泊)
6	4 / 1 (水)			南昌視察見学 八一起義記念館、江西省博物館、 滕王閣 南昌第二中学との交流・夕食会 二中教師家庭訪問 (南昌泊)
7	4 / 2 (木)	16 : 10	寝台特急	南昌視察見学 南昌動物園 南昌発 (車中泊)
8	4 / 3 (金)	8 : 15 13 : 50 17 : 00 19 : 10 19 : 55	JAL - 794 ANK - 475	上海着 上海発 大阪着 大阪発 高松着

※ ANA 全日空 CA 中国国際航空 JAL 日本航空 ANK エアニッポン

※ 中国での時間は北京時間（日本より1時間遅い）で表示

3 脇 信男・高松市長メッセージ

1992年3月24日

南昌市長 蔣 仲 平 先生 :

初春の候 先生におかれましては、ますます御健勝のこととお喜び申し上げます。

両市の友好交流の推進につきまして、平素から格別の御尽力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、このたび財団法人高松市国際交流協会が派遣します高松市中学生訪中親善使節団一行23人が、本年3月27日から4月3日までの8日間の日程で貴国を訪問いたしますが、期間中、友好都市である貴市を訪問することを楽しみにしております。団員は、高松市の中学校の生徒代表で構成されており、各地の視察見学と訪問を通じて、貴国に対する理解ならびに両国の中学生相互の友好親善を深めることを目的としております。

私は、将来を担う両国の中学生相互の交流を通じて、日中友好、また本市と南昌市の友好交流が更なる発展を遂げるよう心から願うものでございます。

つきましては、使節団の貴市滞在中は、格別の御高配を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

末筆ながら、先生のますますの御活躍と南昌市の尚一層の御繁栄をお祈り申し上げます。

高松市長 脇 信 男

4 使節団の活動状況

3月27日(金)

○北京到着

夜8時35分(日本時間9時35分)、北京首都空港に到着。独特の香りが漂い、ついに中国に来たという実感が湧く。

3月28日(土)

○北京視察見学

☆故宮博物院

明の時代の皇帝の宮殿であり、日本でいう城であろうか。72万平方メートルという敷地の広さと歴史を伝える建築物や彫刻等の数々は当時の皇帝の支配力の強さをまざまざと実感させるものであった。



故宮にて全員で記念撮影

☆万里の長城

今回の視察で最も楽しみにしていた場所の一つ。

中国内外からの観光客が多く中国の代表的な観光名所としての重要な役割を果たしていた。

創建は秦の始皇帝によるものであり、その雄大な姿と迫力は、宇宙から見える地球上唯一の建造物と言われるにふさわしく、想像をはるかに超えたものであった。



観光客で賑わう万里の長城

☆明の十三陵

明の時代の皇帝らの陵墓であり、その数13をかぞえることから、この名がついたと言われる。陵墓上に建つ東屋は日本のと異なる建築様式で、また皇帝とともに莫大な財宝が眠っていた地下室には独特の雰囲気があった。

○中国日本友好協会表敬訪問、歓迎宴

訪中後、最初の表敬訪問であったため、団員一同緊張して会場に向かったが、王效賢・同協会副会長の丁寧で流暢な日本語の挨拶に驚くやら感動するやらで、逆にこちらの言葉づかいが恥ずかしくなるくらいであった。

時間の経過とともに、次第に雰囲気も和やかになり、王副会長からは見事な手彫りの角印をいただき、また団員は日本の歌を合唱するなど、交流を深めた。

3月29日(日)

○北京視察見学

☆天安門広場

観光地というより、北京市民の憩いの場という印象であった。都市の中心部に40ヘクタールもの広さを有する広場を設置できる中国の都市計画の余裕に羨ましさを感じた。



広い広い天安門広場！

○飛行機にて上海へ 午後1時30分上海着

○上海視察見学

☆玉仏寺

ミャンマーから来たという横臥する白い仏像のほか、古くから伝わる仏像の数々を見学した。清らかで豊かな表情、鮮やかな色彩が大変印象的であった。

○上海市人民对外友好協会表敬訪問、歓迎宴

陳一心・同協会副会長から、上海市の概要について説明をいただいた後、北京ダックを中心とする豪華な料理でのもてなしに団員一同感激した。ここでも、全員の合唱で感謝の気持ちを表した。

3月30日(月)

○上海市向明中学訪問

上海市において特に優秀な生徒が通う学校で、LL教室やコンピュータ室などの施設も整備されており中国全土でも教育水準の高い学校の一つだという。



向明中学にて互いの名前、住所を交換する

生徒は向学心に満ちており、自分の将来をしっかりと見つめた学習ができているという印象を持った。中でも、通訳を務めた女子生徒は、日本語、英語が話せ、さらにフランス語とコンピュータを学んでいるとのことで、団員を驚かせた。

○上海視察見学

☆豫園

上海の旧市街であった所で、現在は、あらゆる形の岩を中心とする庭園とそれを取り巻く古くからの商店街で構成されており、賑わいは相当なものであった。

○寝台特急列車にて南昌へ

3月31日(火)

○午前8時48分南昌着

○南昌市人民政府表敬訪問、歓迎宴

蔣仲平市長に面会。団長および蔣市長の挨拶に続き、脇・高松市長から蔣市長宛でのメッセージを伝達した後、記念品を交換した。

蔣市長から、市内道路網の整備など都市開発面を中心に説明を受け、最後に蔣市長を囲んで全員で記念撮影した。



蔣市長（中列右から4人目）を囲んで記念撮影

○南昌第一職業学校との交流・夕食会

正門から交流会会場までの両側を埋めつくした全校生徒による「熱烈歓迎」の大合唱に感激ひとしお。同校生徒自作自演のファッションショーを見学、その素晴らしさに感動と驚愕の念を覚えた。

夕食会では、団員と同校生徒が相席し互いの国の歌を教え合うなど、交流を深めた。



生徒自作自演のファッションショーを見学

4月1日(水)

○南昌視察見学

☆八一起義記念館

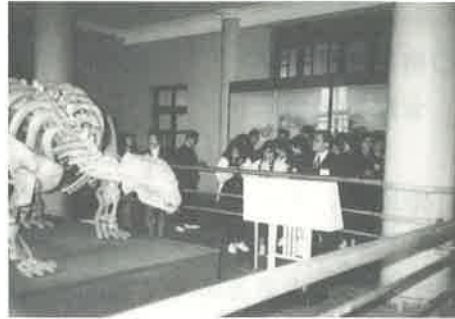
長い歴史を有する国にあって苦難の時代を背負った英雄達の軌跡を辿るこの記念館では、団員達も興味深く見学していた。

国民の歩んだ歴史を大切にし後世に伝えようとする中国の姿勢が強く感じられた。

☆江西省博物館

江西省で発見された恐竜の化石や古代から現代に到るまでの中国の文化を伝える生活用具などが展示されていた。

見学中、館内で自主学習を兼ねて見学する幼い姉妹と出会い、団員が声をかけ記念撮影をするなど、微笑ましい一場面もあった。



恐竜の化石に見入る団員達

☆滕王閣

初唐の時代に創建された江南三大名楼の一つで、現在の建物は1989年に再建されたもの。

雄大かつ優美なその姿に団員一同が感激。滕王閣内最上階のステージで中国古代の歌舞を見学したが、歴史の一場面に迷い込んだような錯覚を覚えた。



そびえ立つ滕王閣

○南昌第二中学との交流・夕食会

初めに同校生徒による書道、水墨画と著名な書道家、水墨画家による範書の披露があった。その技の見事さに対する感動は今も忘れられない。

次に、卓球による交流が行われた。特に、乙武団長と鄭次甫・同校校長の試合には拍手喝采が浴びせられ、雰囲気が一層和やいだ。

夕食会では、団員と同校生徒が相席となり親交を



合唱を披露する団員達

深めた。両国の歌を互いに合唱し、また踊りやマンドリン演奏などで心を込めてもてなしてくれた。そして最後の椅子取りゲームで盛上がりは頂点に達した。

○南昌第二中学教師家庭訪問

夕食会終了後、団員は2班に分かれ、鄭校長宅と教頭宅を訪問した。中国の一般家庭(アパート)での生活の様子を実際に見聞することにより日本との相違点などを体験的に学ぶことができた。

4月2日(木)

○南昌視察見学

☆南昌動物園

この動物園は人民公園の中に設置されており、公園内には、動物園のほかに遊園地、サーカス小屋などがあった。

動物園では、パンダ舎に案内された。団員のほとんどが初めてパンダを目のあたりにするとあって、興奮気味にカメラのシャッターをきっていた。

○寝台特急列車にて上海へ

天候の関係で予定の飛行機が欠航となり、急きょ特急寝台列車で上海に向かうこととなったが、急なことであり、列車の方も予約で満員であった。しかし、蔣・南昌市長の尽力により、団員のため車輛を一つ追加していただいた。

夕食時、食堂車の乗務員から、「あなた達のことはテレビで見ました。この列車に乗ってもらえて嬉しく思います。」と言われたばかりか、食事の好みを聞いてくれるなど、大変親切にいただいた。団員一同感激し、全員による合唱で感謝の気持ちを表した。

4月3日(金)

○午前8時15分上海着

○帰国の途へ

上海紅橋空港から、午後1時30分発日本航空794便にて大阪へ。あっという間の8日間であったが、さまざまな交流の場面が脳裏を横切り、名残惜しい気持ちでいっぱいであった。

5 所 感 集

中学生訪中親善使節団一行23名の団長として平成4年3月27日から4月3日までの8日間、北京・上海・南昌を訪問する機会を与えていただき、貴重な経験を通して実りある友好親善交流が各地で実現し感激している。

特に印象に残ったことを記して、お世話をいただいた関係各位への御礼にかえたい。

[学校生活に意欲的に取りくむ中学生]

上海市では教育重点校の向明中学、南昌市では南昌第一職業学校、南昌第二中学の各学校を訪問したが、共通しているのは、彼らの学習の目的意識がはっきりしていて、何事にも意欲的に取りくんでいることである。特に大学進学率の激化に伴い、自主的に学習に取りくむ時間が多くなっているとのこと。また、南昌市の博物館を見学していた時、学校の休業日にメモを持ち熱心に記録をしながら友人と自主的に博物館内の学習をしている小学生を見かけたが、日本のそれと比較して感心した点である。

[中国の校則は厳しい?]

上海市の向明中学で教育問題について懇談している時、高松市の中学生からの質問で校則の話になった。通訳していた日本での生活経験2年の中学生に、私が「向明中の校則は厳しい?」と質問すると、周りを気にしながら「とっても厳しい」という答えが返ってきた。教員に「何故」と聞くと「保護者の願い、当人の将来の希望を達成させようと考えているのだから当然のことまでです。」という答えが返ってきた。

[熱烈歓迎]

訪中前によく耳にしていた言葉であったが、こんなにも言葉通りとは想像もしなかった。南昌第一職業学校、南昌第二中学での熱烈歓迎、また夜の交流会での歓迎によって我々の感激は最高頂に達した。我々の歓迎会をするのに一か月前から準備をし練習をしてきた話を聞いてまた驚いた。

[友好的な中国人]

上海市から南昌市までの約800kmの往復の旅は「特急列車?」であった。片道約16時間の列車の中では、友好的な中国人の方々との出会いと交流があり、特に列車乗務員の方々との心温まる交流は印象に残るものであった。

[音楽は言葉を超えて友好の輪を広くする]

団員の生徒は美声の立道先生のリードのもと事前の研修会で少し練習しただけの即席の合唱団であったが、見事各地での交流の場ですばらしい合唱を披露した。また、中学生同志の交流では言葉の障害を音楽でカバーしていたのが印象的であった。

[日本語の大切さ、マナーの大切さを再認識]

この旅行を通じて反省することも多くあった。まず我々が使っている日本語の乱れ。北京での中日友好協会副会長の王先生が招待宴席の最後に私にささやいた。「団長さん、日本語は大切に育ててね。」と言ったことがいまだに脳裏から離れない。

最後に、この訪中親善使節団全員が所期の目的を果し、全員無事に帰ることができたのは中国で最初の北京から離陸する上海まで献身的に御世話をいただいた中日友好協会都市交流部長王慶英先生、張海月さんのおかげであるし、また事前の諸準備、旅行期間中に深夜にも連絡を取っていただいた国際交流協会の方々を始め、皆様の御尽力に対し厚く御礼を申しあげて筆をおく。



南昌市第一職業中学にて

高松市とは友好都市である中国江西省南昌市への親善交流訪問は、縁組後幾度となく実施されてきました。しかし、中学生による訪中団は今回が初めてでありました。その記念すべき第一回訪中団に、生徒引率という大役をいただきながらも参加させていただきましたことにまずもって感謝いたします。そして、微力ながらもその責務を果たし、無事帰国できた安心感とともに、感動的であった中国での数々の出来事が今も心に残っております。



万里の長城にて

さて、中国といえば世界でも最も歴史のある国です。その長い歴史にはぐくまれた文化を物語る多くの建築物は、まさに“歴史の国、中国”を痛感せずにはいられないものでした。その中でも北京で見学した“万里の長城”のその雄大なスケールへの驚きと感動は今でも忘れられません。また、“天安門広場”も私の想像を超える広さであり、“毛沢東主席”の肖像画が大変印象的でありました。まさにそれは、写真では絶対に味わえない実物の迫力と言えるでしょう。その他、“明の十三陵”“故宮”また、友好都市である南昌市の“滕王閣”など、中国の歴史と文化を十分に堪能することができました。

私達は今回の訪中で、上海市の“向明中学” 南昌市の“南昌第一職業学校” “南昌第二中学”へ赴き、施設の見学および教師や生徒との交流を図りました。LL教室やパソコン室、ミシン実習室などを見学しましたが、高松の中学校のそれと比べてみても、設備面ではまだかなりの差があるように思われました。しかし、そこに学ぶ生徒達の生き生きとした目の輝きには、中国と自己の未来を切り開こうとする意気込みがあり、そのために自ら進んで学んでいこうとする姿勢が感じられました。学歴重視と言われる日本の教育の中にあって、“学ぶ”ということの本質は何かを考えさせられた様な気がいたしました。

また、交流会での日中両国中学生の様子は、文化の違いがありながらも、基本的には同じ年代の若者であることを改めて思わせるものでした。団員の生徒達は、親善使節としての役をみごとに果たしたと思います。それぞれに友人ができ、今なお文通によりその友情をはぐくんでいる様です。

いずれにせよ、乙武団長先生、立道先生という心強い先生方、そして明るく元気で心豊かな20名の生徒達との今回の中国の旅は、私にとって一生忘れることのできない、かけがえのない思い出となりました。そして、中国の人々との出会いはもちろん、彼ら団員との出会いも私にとっての財産となることでしょう。

最後になりましたが、私達の訪問に際して心からの熱烈歓迎をいただいた訪問地の方々、そして終始直接私達のお世話をいただいた中日友好協会の王慶英様と張海月様に心より感謝いたします。又、今回この訪中使節団の企画とともに、あらゆる面で御心配いただいた財団法人高松市国際交流協会の皆様にも厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

車窓に広がる風景は、どこまでも黄色と緑の世界。そして時折ポツンと見える、煉瓦造りの集落、水路に浮かぶ小舟や群れ遊ぶ家鴨たちが、のどかな田園地帯の点景となって、一層旅情をかきたてる。

上海—南昌往復32時間、日本にいれば気の遠くなるようなこの列車の旅も、広大な異国の大地にあれば、壮快な旅になる。心地良いスピードとリズムに揺られながら、初めて出会った者同志語り合い、歌い、異国の人々との素朴な交流の輪も広がった。



南昌第一職業学校での熱烈歓迎

振り返れば、年度末の多忙な時期と重なり、さしたる準備もできぬままの不安な出発だった。詳細を知らされていないもどかしさもあった。その上、北京空港に降り立った途端、係員の高圧的な態度に出会い、暗澹たる思いにかられ、いやが上にも緊張が高まった。

しかし、それも友好協会の王さん、張さんの素晴らしいお人柄と、誠実で親身なガイドのお陰で、いつの間にかすっかり旅を楽しめるようになっていた。“案ずるより生むが易し”である。あれこれ気遣われることの多かった団長先生や中島先生には申し訳ないが、本来怠け者で楽天家の私は、他力本願を決め込み、生徒以上に楽しんでいたかも知れない。列車の旅で、時間の流れに任せてゆったり過ごす快適さを味わいながら、現金な自分に苦笑していた。

長いように思っていた8日間の親善旅行も、終わってみれば、わずか三都市を形式的に駆け巡ったに過ぎない。それでも、百聞は一見に如かず。言語、風俗、自然環境の違いはもちろん、「これが世に言う下手物食いでは？」とも思われる食文化の違いなど、未知の異質な文化に触れる驚きと興奮、快い緊張感や楽しさに思わず引き込まれ、ぬるま湯文化の中で鈍っていた感覚が呼びさまされた思いがする。そして、近くて遠かった中国をほんの少し知り、帰国してからなお一層その不思議さ、奥深さに魅せられ、その歴史に興味をわいてきたように思う。

車も人も自転車も、同じ道路にあふれ出る騒然とした様子、人々の悠然たる様子は、広大な国土に生きる人々の国民性だろうか。春浅い季節だったからか、北京はお世辞にも美しいとは言えなかったが、街角のあちこちで人々の語り合う姿があった。広場や河岸では老若男女がグループで太極拳を行い、独自に体操や発声を行う人々もいた。感心させられたことに、肥満体の人、腰の曲がった老人は見られず、若い女性たちは皆スタイルが良く美しかった。

あらゆる文化を貪欲に飲み込み、活気にあふれた国際都市上海にも、中国の不思議さを感じて興味は尽きない。上海と言えば、見学地の豫園近くの路上で、制服姿が珍しかったのか、生徒や私達は幾重もの人垣にとり囲まれ、好奇の視線を浴びるといふ、何とも奇妙な体験をした。これほど速慮のない視線を投げかけるのも、上海人特有の好奇心旺盛なるが故かと思ったが、果たしてどうだろうか？

それはさておき、表敬訪問や学校訪問では、団員一人一人に印鑑を贈って下さり、独特の美しいショウや演芸を披露して下さるなど、心憎いばかりの素晴らしい歓待を受けた。何よりも、南昌の先生方や生徒の皆さんの、文字通りの熱烈歓迎ぶりには、「最高の持て成して遠来の友を迎える心意気」を感じ、涙がこぼれるほどの感銘を受けた。それと同時に、「これほどの歓待を受けるだけの何が自分に備わっていたのだろうか。」と、場違いな所に来てしまったような恥ずかしさを覚えた。

今回この初めての使節団に参加して、とても個人ではお会いすることのできない要職の方々にお会いできたことも大きな収穫だったと思う。特に印象深く感銘を受けたのは、北京の中日友好協会の副会長・王女史の美しい日本語とその上品なお人柄だった。私達の母国語を、これほどまでに優しく、美しく語る人は、日本でもそう多くはいまい。

何かにつけて不自由な環境にありながら、国家のために働き、独学で他国の言葉や文化を学んでいる人々に接し、私達はもっと母国の文化を学び、伝統を継承していかねば恥ずかしいと思った。

不安だった親善旅行も、団員全員が健康に恵まれ、天候に恵まれ、そして人に恵まれ、語り尽くせないほど多くの土産話をもって帰国することができた。お世話になった方々に心から感謝申し上げます。今後も、この計画が単なる形式的な交流に終わることなく、できるだけ多くの生徒や教師に継承され、真の理解につながるものにしてほしいと願う。

私は外国に行きたいと思う気持ちが強く、そこへ中国訪問の話がはいてきました。

訪問する前の私の中国についての印象といえば発展途上国、そして不便で不潔という印象をもっていました。しかし「百聞は一見にしかず」とはこのこと、思ったより快適で清潔感があり、技術も進歩しています。

また見学地の文化財や川、山、平原などは、日本にないスケールの大きいものばかりで、それを目の前にして感動しない人などいないのではないのでしょうか。実際、私が万里の長城でその広大な風景に茫然と立ち尽したのですから…。

中国の中学生との交流会では、言葉の通じないなかジェスチャーや片言の英語を使って自分の考えや気持ちを伝えました。彼らはしっかりしていて私たちより英語は上手にしゃべり日本語やフランス語もはなせる人がいます。また温厚でもあります。

かつて日本が中国と戦争をしたことが不思議でなりません。今回の私たちの役目のひとつに二度と戦争をおこさないということもあるのかもしれない。

中国では「考え」「生き方」「習慣」などすべての面で日本と違って、とまどうこともありいろいろ迷惑をかけました。

このような7泊8日間の中で私はたくさんを学びました。それは日本の中にいるだけでは知ること感じることもできない貴重な体験です。私の体験からは「一」中国、いや世界のさまざまな文化を尊重し、同時に日本特有の文化を思い返し大切にすること、「二」世界平和を深く考えることなどを学びました。そして同じ釜の飯を食った20人の仲間たちは最高の友達です。他の土地で寝食をすることは不安なものです仲間のおかげで安心できたものです。

これから、この体験を通じて得た、物事の見方、いつもの心の持ち方を残りの中学生生活に役立て将来にむけてがんばりたいと思っています。

—本当に夢のような7泊8日でした。—



万里の長城にて

私が今、この紀行文を書けるのはささいなきっかけからでした。毛沢東のつくれた中国で親のついていない同い年の中学生と一緒に8日間を過ごす。きっかけというのも、軽い気持ちからでした。しかしその気持ちを積み重ね私は一つの階段をつくりました。



天安門広場にて

途中崩れかけたこともありました。でも学校の仲間、先生方、家族のおかげでそのヒビはなおすことができました。そして3月27日、雨の空港をたち一日目の目的地、北京へ到着。ゆれる体を支え私は期待の第一歩を踏み込みました。この感動は、表現できない程すばらしいものでした。一つ国境を越えた中国との友好を目的とした8日間、南昌市での熱烈歓迎、上海、建物、列車、フィルムはなくなる一方。見るものすべてが私には新しすぎるほどでした。あゝここは日本じゃないんだと。この旅を通じて、これから特に私が大切にしたいと思ったのは、上海で通訳のオーさんと中国について語ったことと南昌市でできた友達のことです。私はオーさんに「中国をどう思いますか。」とたずねました。するとオーさんは素直にそしてまっすぐみつめた中国を答えてくださいました。

実をいうと私は内心、中国へ行くことに少し不安を抱いていました。日本人であれば理由は、わかると思います。しかし中国の人といると、全くそんな気がしないのです。

南昌市第一職業学校、第二中学共に大変な熱烈歓迎を受けました。そして交流会のときなんと私は英語とジェスチャーで中国の人とはなしていたのです。何が好き？、何歳？、もう楽しくてたまりませんでした。それを目的で来てるはずなのに。

南昌市を離れるときにも、仲良しになった友達が見送りに来てくれました。泣きました。みんな泣いていました。半日しかつきあっていないのに、なぜか別れるのがいやでした。帰国後、何通か手紙がきました。

顔と名前が一致しないのですが、言っていることで誰かわかります。この旅には多くの出会いがあり出会った分だけ別れもありました。同じ派遣団員の19人、先生方、そして中国の仲間達、通訳のオーさん、チョウさん、ショウさん。みんな私にとって必要な人たちでした。私はこの人たちを一生忘れることはないと思います。そしてこれから、この経験を基にこの先ずっと、南昌市と高松市との交流がとぎれないようつとめ、もっと広い世界へ活躍することを願いそして実現させようと思います。最後になりましたが、乙武団長、中島先生、立道先生、国際交流協会のみなさん、学校の先生方、本当にありがとうございました。私はこの8日間を、ぜったいに忘れません。それが最後の指令だと思っています。

「別れたくないよ。」「忘れないからね。」と、高松空港で皆、言いあっていた。私はこの光景、この旅をよく思い出す。まるで昨日の事のように。

この中国行き話を聞いた時、『中国って本当はどんな国なのだろう。』と思い、中国にだんだん関心がわき始め、「行きたい!」という答えを両親に話した。そして、この旅の申し込み書に印を押してくれた。数日後にその話が私に決まった時は、いつにない声を上げて喜んだことを覚えている。

研修も終え、結団式を終えると、私の頭の中は中国の色に染まっていた。

出発するときは、大勢の方々が私達を見送ってくれた。その時、身を包んだ緊張感は、とても心地良かった。

着いた北京は、空港内も薄暗く、どんな所なのかわからなかった。次の日から、天安門、故宮、万里の長城へ向かった。さすがに、天安門に掲げてある毛沢東の肖像画を生で見た時には、「中国だ!」と感じた。万里の長城では実際に石の坂道を登った。急な傾斜は、登るのは簡単でも、下るのは怖かった。が、下りてきて、登った所を見上げた時は、自分に感心してしまった。

上海では、私達が何だか奇跡を起こした様に、21日間降り続いていたという雨は止み、空は晴れ渡っていた。そして、向明中学のすばらしい語学力を持った女の子には驚かされた。なにせ、同じ年齢なのだから。

南昌につくまでの寝台車は狭かったけど、寝心地が良かった。今思うと寝苦しそうなお所だった気がするのだが。皆と一緒にいたからなのだろうか。

南昌では熱烈な学校の歓迎に感動した。この日のために第一職業学校はファッションショーを開いてくれ、また第二中学の交流会や交歓会では、日本舞踊を華麗に舞ってくれた徐さんが、メッセージの入った扇子やバレッタ、花とかを手渡してくれたとき、知らず知らず涙があふれた。半日なんて少ないと皆で泣いていた、バスの中でも。ここで、国や言葉が違っていても誰もが友達になれることを身をもって知ることができた。

大阪空港でやけに明るかった私達も、高松に戻ってあんなに別れを惜しんだのは7泊8日も一緒に過ごした仲だからと、すばらしい友情に今でも誇りを感じている。

何もかもが新鮮で、どんなに小さなことにも素直に感動できた。もう一度、中国を訪れたいけど、こんなにすばらしい旅行は、もうできないと思う。この旅行はとても素敵すぎたから。

私と一緒にだった19人の仲間、3人の先生、通訳の王さんと張さん、私達のために寝台車の車両を増やしてくれた南昌の市長様、私達を守ってくれた方々、そして私を支えてくれた玉藻中の先生方、良き理解者であった家族や友達。この感動の連続は、あなたたちが居なければできなかったこと。心から感謝します。本当にありがとうございました。



南昌でできた友達徐さんと一緒に

「中国に行きたい人は先生の所まで来るように。」

そう言われてすぐには、何も考えていなかったけど、その日、家族と話しているとなんだか行ってみたいなと思いました。でも逆に、友達ができなかったらどうしようと思うようにもなりました。そんなふうにならざるを得ないなら、

「まあ、行ってこい。」

と家族に言われたので、ぼくは早速、先生に言いました。

それからしばらくして、内定の通知がきました。研修の時にはずっと緊張しっぱなしでいたけど佐々木君と友達になってからは気軽になりました。

そんなことがありながらも出発し、中国へ着きました。その時の感動は今でも忘れられません。「これが中国への第一歩。」と言いながら北京空港を出たりしたのを。

空港からすぐホテルに行きました。みんな「オー」「ヤッター。」などと喜びました。とてもきれいなホテルでした。その日は、乗り物ばかりだったのでつかれ、すぐ寝ました。

2日目からの観光地見学、及び学校訪問では特に友好都市、南昌市の南昌第一職業中学、第二中学、北京の万里の長城が印象に残っています。

第一職業中学では、学校の人が大勢で歓迎してくれました。まさしく熱烈歓迎です。そして中国の学生と日本の学生との交流会では、「さくら」をいっしょに歌ったり、言葉の交換などを行いました。とてもたのしい時間でした。

また、ファッションショーもすばらしかったです。すべての作品が手作りとは思えないほどで、ぼくたちがそんなに作るのにはどれくらいかかるだろう。いや、とても作れないだろうと思いました。

第二中学を訪問した時は、卓球の交流試合などをしました。中島先生は果敢に勝負を挑みましたが、さすがは卓球王国、中国です。

その後、また生徒同士で交流会をしました。歌を歌ったり、写真をとったりと、すばらしい交流会だったと思います。でも、全体の交流会では団員としてふさわしくない行動をとってしまったのをとても後悔しています。

しかし、今回の中国訪問は、とても充実したものだと思います。乙武団長先生をはじめ、中島先生、立道先生、そして王さん、張さん、そして団員のみんなといっしょに話しをしたり、遊んだり、しかられたりしたことがとてもとてもすばらしい思い出になりました。どうもありがとうございました。

これからは、中国の友達と文通等を積極的にやって、より一層よい友達になれるようにしたいです。



乾杯した後の和やかな
雰囲気の中で（南昌二中）

訪中親善使節団に参加できて本当によかった。私は、心からそう思います。中国に行くまでの不安とは逆に、私はたくさんの宝物を持って帰ることができました。

今まで、教科書のさし絵やテレビでしか見たことのない万里の長城は雄大で、荘厳な建造物でした。高松と続いているとはいえど、限りなく高く青く広い空。また、上海から南昌へ行く列車の窓から見た、遠々と続く菜の花畑。私の好きな明るい緑に輝く黄色が映え、とても言葉では表すことのできない景色でした。

学校訪問では、上海の向明中学、南昌第一職業学校、南昌第二中学を訪問し、中でも南昌第二中学で友達になった劉梅さんは、別れる際、私が泣いているのを見て、

「Don't cry. Let's smile」と言ってくれました。

そもそも私がこの使節団に参加しようと思ったのは、新しい自分を創るチャンスかもしれないと感じたからです。中国の学生との交流のとき、なかなか話せなかったけれど、思いきって「你好」と声をかけてみました。すると「你好」と返事を返してくれてとてもうれしかった。かたことの中国語と知っているだけの英語だったのに、一生懸命聞いてくれたり話してくれたり、時にはジュスチャーで……今考えると、ほんの少しの勇気をだせば話しかけることができる。けれど私にとってそれはすごく勇気があることでした。でもあの時、思いきって話しかけてよかった。そして、少し成長できた自分をうれしく思います。一緒に行った高松市内の中学生もはじめて会った人ばかりでしたが、日を重ねるごとに仲良くなれ、いつまでも大切にしたい仲間です。

南昌をたつとときに駅まで見送りに来てくれた人たちや、交わした握手、訪問した街のことなど、これらの思い出を私は絶対に忘れたくありません。

中国語の「さようなら」は「再見」とかきます。再び見る、つまり「また会いましょう」という気持ちがこめられているのだと思います。だから、私が出会った全ての人に「再見」を。そして、こんなに貴重な体験をする機会を与えて下さり、お世話をして下さった先生方、ありがとうございました。



南昌二中で劉梅さんと

中国に着いて、まず目に入ったのが、たくさんの「自転車」であった。道の幅も、車道と同じぐらいの広さだった。行く前にテレビなどに登場する中国とは、全くちがっていた。

中国での食事は、日本よりもやや油っこく、ぼくには少し、負担がかかった。しかし、その味は格別で、日本の「中華料理店」でも味わえないようなすばらしい「味」だった。

実際、中国は、国土が非常に広いので、なにもかも、スケールがとてつもなく大きかった。日本では考えられないような大きさだ。

まず、最初に行ったのが、首都である北京だった。北京の中日友好協会の人達との食事がおいしかったし、楽しかった。万里の長城のスケールにもびっくり。これを「歩いて何千キロ」という人がいたことにまたびっくり。

次は、上海だった。ここは、北京より、人が多く感じられた。

次が、高松市の友好都市、「南昌」だった。ここは、「五ヶ年計画」ということをしているらしく、工事現場がたくさん見られた。南昌市の市長さんにも会った。思っていたよりもすごくかんげいされ、とてもうれしかった。その上、この市長さんには、もう一つ、ぼくが一番印象に残ったことをしてくれた。それは、南昌から上海へもどるとき、本当は、飛行機の予定が、前日までの雨で、ぼくらがずっと後に乗ることになってしまい、急きょ、列車になった。その列車も、ほぼ満席だった。しかし、ここは市長さん、列車を一輛、ぼくらのために、付け加えてくれたのである。これを先生から聞いたときには、涙がでるほどうれしかった。どれだけぼくらをかんげいしてくれたか、心の底から分かった。

この中国への旅行で、中国の学校の人たちとの交流もでき、また、中国はテレビの報道とは、ちがうんだということが分かった。旅行に行ってから、はや数ヶ月が経つが、この間に見た中国の話題のテレビ番組を見ても、全くはなれた、未知の国という気がしない。

それと、もう一つ、うれしかったのは、市内全ての中学校の人たちと「友達」になれたことだ。これもまた、旅行のいい思い出となるだろうと思う。鶴尾中学校でも、修学旅行がある。中国旅行を経験したぼくには、四日間の国内旅行で、小さな旅行に見えてしまうが、団体旅行という点は一緒だ。中国旅行では、大きな声を出して笑ったりして、みんなに迷惑をかけた。これを一つの反省点として、修学旅行では、みんなの迷惑にならない、立派な班長として、活やくしたつもりだ。

それから、南昌市の市長さん、列車の一輛追加、ありがとうございました。



おまわりさんのいる島「安全島」

七泊八日という、この長い中国訪問で、一番感激したこと……やはり、異国で友達ができただことでしょうか。交流会の時、恥ずかしくてもじもじしていた私に、話しかけてきてくれた三人の女の子。かたことの英語で、名前と年齢を聞きあいました。あとは、何を話したのかよく覚えていないけれど、一言一句が通じる度に、うれしさがこみあげてきたことは覚えています。交流会は、わずかな時間でしたが、とても楽しかったです。



南昌二中で楽しく交流できました

その後の歓迎宴も、とても印象に残っています。私に話しかけてきてくれた三人の女の子が、日本のおどりをおどってくれたのです。きれいな着物を着て、お化粧をして、そして何よりも、美しくおどって……。私は、思わず見とれてしまいました。そして、私達をこんなに歓迎してくれていることに、本当に感激しました。たった何時間かの短い学校訪問でしたが、別れはとても辛かったです。日本舞踊をおどった時に使ったおうぎと、髪かざりをくれました。おうぎには、メッセージを入れて。目に涙をためながら、お別れをしました。もっといっしょにいたかった、という気持ちを残して。でも本当に楽しい時間でした。

さて、もう一つ、私が感激したことがあります。それは、あの有名な、万里の長城に登れたことです。今まで、地図やテレビでしか見たことのないあの万里の長城に登るのかと思うと、とてもわくわくしていました。しかし、私は、自分の無知に気づかねばなりません。万里の長城に登ることのたいへんなこと！あんなに険しくて、急な傾斜だなんて、知りませんでした。そして、それを一生懸命に登っていることと、あのあこがれの場所に来ているのだ、という思いで、体がほてってきました。今でも、あのすばらしいながめと、冷たい風は、目をつぶればすぐに目に見えるし、体に感じるすることができます。

他にも、いろいろなことがあり、その度に今までに感じたことのない感激でいっぱいになりました。特に、訪問した先々で、たいへんな歓迎をうけたことは、中国へ来てよかったとつくづく思われました。そして同時に、私達は、日中友好の大切なかけ橋となっているのだ、という使命感でいっぱいになりました。今年、日中国交回復二十周年の年になります。日本と中国の関係がより深い関係になれるように、ほんの少しですが、私も努力していこうと思います。中国でできた友達とは、これからもずっと文通を続けていこうと思っています。この八日間で学んだことをこれからの生活に生かし、国際交流ということを考えていきたいです。

多勢の父母や先生方に見送られ、数千年の歴史を持つ中国へ旅出しました。見るものすべてに目を見張り、万里の長城・明の十三陵・故宮等多くのものに心を打たれました。四国に住んでいるぼくにとって日本さえも広く感じるのに、中国は想像を超える広大な国土と多くの自然を有し、堂々たる風格の建造物が数多くありました。

万里の長城は、現代のように文明の発達していなかった時代に、これほどまでの大きなものを造るのにどれだけの年月と人々が費やされたのかと思うほど想像を絶するものでした。長城の上からの眺めは山々が連なり、一部では地平線も見えたりしました。このことによってあらためてこの国の広大さを思い知らされました。

買い物の場で一番気がついたことは、中国の品物の包装や箱が簡素であるということです。日本では、包装や箱をぜいたくにしすぎていると思います。これは品物についても同様のことが言えます。中国では、見かけをあまり気にせず、古いものは古い物のよさとして扱っていることにとても感心しました。これは、私たち日本人も見習わなければならない点だと思います。

また、団員のつながりの中でもよいことがありました。それはみんな最初あまり話をしませんでした。八日間行動を共にしたことによって帰りの時には別れを惜しむほどの仲間になったことです。

このように感心したことや感動したことはたくさんありますが、一番印象に残っていることは、中国の人々の心の広さです。南昌などの中学校を訪問した時、門に大勢の人々が拍手で出迎えてくれました。さらに、門には「熱烈歓迎」などと書かれた幕までありました。その時は本当にうれしかったです。そして一面識もないぼくたちを快く迎えてくれました。食事会のときには、まるで以前からの友人であるかのように、にこやかに接してくれ、かたことの英語や中国語で会話をしました。食事を終えた後、みんなで歌を歌うと、向こうの人たちも歌を歌ってくれ、ぼくたちも歌を教えました。本当に時のたつのも忘れるほど、楽しい時を過ごしました。別れる時にはみんないつまでもバスから手を出して握手をしたり住所を教え合ったりしていました。本当にみんな楽しく過ごせ、いっしょに歌を歌っている時の様子が今でも頭に思い浮かびます。高松市訪中親善使節団に参加して中国の人々の心の広さと暖かさに一番心を打たれました。今度中国の人が日本に来たり、再び会う機会があれば、この体験を生かし、同じように、いやそれ以上の接し方をしたいと思っています。

そして、今後ますます日本と中国との関係が深まるよう、自分も何らかの形で協力をしたいと思っています。



予想をはるかに超えた万里の長城

拝啓、皆様。その後どうお過ごしですか。中国から帰って、もう二ヶ月が過ぎようとしています。

かたづけをしていて一冊のメモ帳を見つけました。3月27日から4月3日、帰国までのほんのささいな出来事を取りとめもなく書きつづっていました。「北京到着・九時頃」バスの中で書いた走り書きから始まって、4月3日に列車の中で書いたガタガタの字まで…。あの8日間、本当にいろんなことがあった、とメモ帳片手に一つ一つ思い返してみました。



北京の故宮にて

聞き慣れない言葉が飛び交い、見慣れぬ風景が広がり。なにしろ周りのもの全てが新鮮で、ただがむしゃらに写真を撮った1日目。心配していた料理もおいしくてほっとした2日目。社会の教科書でしか見たことがなかった自転車の行列や毛沢東の肖像画を見ることもできました。万里の長城を自分の足で歩き、故宮、豫園や滕王閣を見学した時、日本とは全く違った歴史を感じたような気がします。

3日目、4日目を迎えるころには、もうすっかり、皆が仲良くなって、少しはめを外しすぎたことも確かにあったけれど、それも一つ勉強になりました。向明中学では同じ14歳の邊彦さんに出会いました。

5日目に友好都市である南昌市を訪ずれ…というところで、あの第一職業学校での熱烈歓迎ぶりを思い出しました。バスを降りたとたんにもものすごい声が聞こえて、正門をくぐると、列をつくった生徒の皆が旗をふりながら迎えてくれる、その光景が皆様の心にもよみがえってきませんか。私はその日の夕食会で薄加玉と友達になりました。中国で会った人はみんないい人ばかりで、その日も、私の下手な英語をいやな顔ひとつせず聞いてくれたのです。

6日目に第二中学で最も仲の良い友人をつくりました。彼女とは今でも、そしてこれからもずっと文通を続けていくつもりです。家庭見学をした時は少年宮で踊りをならっている女の子が踊ってみせてくれました。「イー・アール・サン…」と口で数えながらステップをふむ様子がかわいくて、みんなで喜んだこともありました。列車の中で歌ったことも…。

一週間以上あった旅でしたが、いつの間にか時が過ぎ去り、あつという間に帰国の日がやって来ました。友好協会の張さんが涙を流しながらも笑顔で見送ってくれました。

8日間のこの旅行もけっしてきれいごとばかりではなかったけれど、とてもいい経験になりました。本当に、学んだことが多すぎて、今、これだけでは全然かききれませんが私の心の中でこの旅のアルバムが空白になることは絶対にありません。一緒に旅した19人の大切な仲間達一人一人ともこれからもずっと友達です。そして皆と再び中国を訪れる日のために、もっともっと勉強しなければならぬことも忘れません。敬具

追伸、引率して下さった先生方、本当にお世話になりました。さようなら。

昔、日本と中国は、親密な国際交流をしていた。渡来人と言われる人々が、中国の文化を日本に伝え、日本からも、中国の優れた文化を学ぶために荒海を舟で渡った。命がけだったにちがいない。それを考えると、この訪中親善使節団員に選ばれて、ぼくは本当にラッキーだと思った。

念願の万里の長城は、険しい山に、堅固にそびえ立っていた。これが遠々と六千キロメートルも続いていると考えると、何やら吹く風にも長い歴史を感じた。僕は、秦の始皇帝になったような気がした。

北京の街の通りは、自転車や歩く人たちであふれ、活気に満ちて、目まぐるしく動いていた。警察官が交差点に立ち、手ぎわ良く交通整理をしていた。天安門広場や故宮博物院では、このような忙しい世界を離れて、静寂と悠久の時間が流れていた。日本とはまたちがう中国文化の建物に引きつけられた。

雄大な中国の大地、海とまちがえそうな河川を列車で越え、僕たちは南昌へ到着した。南昌市長や南昌の対外友好協会を表敬訪問、次に南昌第一職業中学校を訪問すると、「熱烈歓迎日本国高松市師生友好訪問」と書いてあり、目を見はるほどの熱烈大歓迎であった。ファッションショーなど歓迎会があったが、驚いたことは、学校中が僕たちを歓迎してくれたことだ。日本だと、学校訪問をしても、こんなに学校中をあげて大歓迎はできないだろうと思った。夕食会では、隣の高校生に、名前の発音を教えてもらったり、名刺の交換などもあった。

南昌第二中学校は、勝賀中学校と友好関係にある。旅行前に山本宏校長先生から、南昌第二中学校の説明や、わが校で十五人の中国帰国子女が学んでいることや、今年の卒業生全員が、頑張っただけで希望校に合格したことなどを聞いていたので、特に鄭次甫校長先生と握手、名刺交換をして、僕は、感無量だった。

中国語は勉強不足で、ほとんど理解できなかった。特に僕の胸のポケットの中に、旅行の安全を願っての御守りが入っているのを、日ごとく見つけて、これは一体何かとたずねてくるのだが、僕には一向に理解できなかった。ようやく御守りということに気付いたが、どう説明したらよいものやら、とほうにくれてしまった。通訳の張さんに御守りの説明をしてもらったのだが、果して十分理解してもらえたかどうかは、定かではない。でも、英語で交流をした時には、少しは理解ができ、お互いに意志を通じることができたと思う。

国際社会の中では、日本という殻の中に閉じこもってはいけなこともよく分かった。これからは、もっと広い世界に目を向けて、知識を増やしたいと思う。この八日間は教室で勉強していても気付かない、中国のことを知れたと思う。今後とも南昌で出来た友達と交流し、お互いに学び合って、これからの日中親善の掛け橋に役立ちたい。



上海の豫園にて

私は今年の春休みに、高松市の中学生訪中親善使節団の団員に選ばれ、中国へ行って来ました。この旅では、乙武団長先生をはじめ、私達を率いてくださった先生方、8日間行動を共にした団員の皆、そして現地で私達を温かく迎えてくださった中国の方々との出会いが何よりうれしいものでした。

行く前は、団員の皆と仲良くなれるか心配していたのですが、とても話が合い、良い人ばかりだったので、すぐに打ちとけ合え、飛行機の中では楽しく話が出来ました。

北京で私が楽しみにしていた場所は故宮とやはり万里の長城でした。故宮は明朝、清朝合わせて26人の皇帝の住居で、流石に威圧感があるというか…。とにかくすばらしかったです。万里の長城の方は、テレビ等で何度か見たことがあったのですが、それではわからなかった雄大さがしみじみと伝わってきました。

上海での見学は、玉仏寺、豫園で両者とも中国を思わせる風格を漂わせていました。

南昌では博物館、八一起義記念館や滕王閣などに行きました。八一起義記念館では、革命の様子がよく分かりました。滕王閣は唐の時代の建物だということで、とても興味深いものでした。

また、私達は表敬訪問や学校訪問も行ない、現地の方との夕食会なども開いていただきました。学校訪問は、上海では高名な向明中学を、南昌では第一職業学校と、第二中学校の二校をそれぞれ訪問しました。どこの学校でも生徒や先生方と親しくなれ、住所や名前を教え合って、通訳の方がいなくても何とか英語を使ったり文字に書いて会話したり…。すごく歓迎してくださり、それに答えられたかどうか自分ではわからないけど、とにかくうれしかったです。

表敬訪問では、一緒に食卓について会話をしながら食事をしたりしたのですが、通訳の方がいなかった時があって、必死で伝えようと思いました。相手に分かってもらえた時はすごくうれしかったです。

そんな楽しい8日間でしたが、終わりも別れもあるわけで、南昌をたつ時に第二中学校の方が見送りにきてくれた時、すごくうれしくて別れがつかなくて「再見」の言葉が思わず涙声になってしまいました。汽車に乗っても窓から声をかけたり握手をしたり、最後の最後まであきらめきれませんでした。

私がこの春休みに、こんなに良い思い出をつくれたのも、最初に書いたように団員の皆、現地の人々との出会い、そして私の家族のおかげだと思います。この旅での出会いをこれからもずっと忘れず、そしてこの貴重な体験をこれから先の事に生かして行きたいと思います。

最後にこの旅でお世話になった方全員に、心からお礼を言いたいと思います。「謝々。」



上海市向明中学にて
遍さんと一緒に

中国—日本文化の発祥の地ともいわれる中国をこの目で見られるのはとてもうれしいことでした。

中国行きが決まってからの五ヵ月間、私は中国の文化、経済、言葉などを一生懸命勉強しました。

三月二十七日、私は新しい発見への期待で胸をおどらせながら、しかしまた、見知らぬ土地での一週間におよぶ旅への不安もいだきながら中国の地に降り立ちました。翌日から中国日本友好協会への表敬訪問をはじめさまざまなスケジュールにおわれ、うかれている暇はありませんでした。



南昌二中にて

はじめて中国の人に紹介されたとき、少し緊張しながら「你好」といいました。すると日本語で「はじめまして。」と喋ってくれました。それで少し安心しました。

各地の視察見学場所では日本人ということでジロジロと見られた時はむっとしましたが私達もよく「外人、外人…」と喋ったりしていることを考え少しはずかしくなりました。

各中学校での訪問はとても短い時間だったけれど忘れられない大切な思い出となりました。六日目に訪問した南昌第二中学では、卓球を通しての交流が行われました。そして、いよいよ南昌を離れる時には交流した中学校の生徒がたくさん見送りに来てくれ、南昌の町並みが涙でかすんで見えました。そんな別れを重ねるたびにほんとうに中国に来てよかったと思いました。上海をはなれ日本にたつ時も、それまでずっと引率して下さった王さんと張さんとの別れもとてもつらかったです。

私にとってこの一週間は何にもかえがたい一週間になりました。団員二十名の団結を深められたことをはじめ中国の壮大な歴史を自ら体験でき、そしてなによりもたくさんの友だちができたことです。私たちにこんなすばらしい機会をあたえて下さった方々のご期待にそえるように、すばらしい国際社会をつくっていきたいと思います。

平成四年三月二十七日から四月三日までの八日間、ぼくは「中学生訪中親善使節団」の一員として中国に行ってきた。中国と日本は、古代の文明からの付き合いであり、切っても切れない関係である。日本は中国から、多くの文化などを学んだ。つまり中国は、日本文化の親である。その文化の親ともいえる中国を日本は、一九三七年の日中戦争・南京大虐殺事件などで苦しめてしまった。悼ましい暗い過去である。ぼくは、心配だった。本当にぼくら「日本人」を、心から歓迎してくれるだろうか。ぼくは、複雑な気持ちを心に抱えたまま、日本を出発した。



天安門広場の広さには驚きました

三月二十七日、北京着。北京空港は夜ということもあったが平然としていた。ホテルがものすごくきれいで感激する。三月二十八日、万里の長城、明の十三陵、故宮を見学した。どれもこれも、中国という国のスケールの大きさに驚くばかりであった。この日、中日友好協会の歓迎宴に招待される。中華料理には、まだ慣れない。三月二十九日、天安門広場を見学してから北京を出発する。上海に着き上海市人民对外友好協会歓迎宴に招待される。上海料理は日本料理に味がよく似ていて、おいしかった。三月三十日、向明中学を訪問。教育水準の高さには驚いた。この日、上海を出発し、十六時間鉄道にゆられて三月三十一日に南昌に到着する。南昌市は、高松市の友好都市であり、熱烈な歓迎をうけた。南昌第一職業学校を訪問した時は、学校あげての歓迎ぶりに、ぼくらは圧倒された。夕食会では、料理を食べながら、歌を歌い合ったりして、本当の交流ができた気がした。四月一日、南昌視察見学をしてから、南昌第二中学校を訪問し、ここでも熱烈な歓迎をうけて、ぼくらは感激した。夕食会では、ぎこちない英語で会話をしたが、相手の言いたい事は全部分かった。今思うと、少し不思議である。四月二日、思い出深い南昌を出発して、鉄道で上海に向かう。四月三日、上海に到着。上海市内で最後の買い物をする。家族の人達の喜ぶ顔が目に見え、その後、上海を出発して日本の大阪に向かう。日本についた時は、安心と共に疲れが、ドッと押し寄せてきた。

初めに書いた、心配だったことは、全くなかった。どこに行っても、心から歓迎してくれた。中国は、国の面積も広いが、人々の心も広いということを知った。日本は中国より進歩しているが、心の広さなどでは劣ってしまう。今ぼく達に必要なのは、心のゆとりである。ぼくは、中国から日本という国を見つめて、つくづくそう思った。ぼくの今の夢は、日本と世界中の国々が、よりよい友好関係になるように、世界中を飛び回ることである。他の国々との友好関係を保っていれば、戦争という愚かなことも起こらず、平和な世界になるだろう。ぼくは、中国に行ってきた、近頃つくづくそう思うのである。

「中国」と聞いて思うことはまず広いということです。でも、日本で考えている広いとはまるでスケールがちがいました。そして、見ること、聞くこと、感じること全て僕にとってとても新鮮なものでした。

僕達は中学生訪中親善使節団としていろいろな所へ行きました。行く先々全ての所で、“熱烈大歓迎” どれ程この言葉に圧倒されたことでしょうか。ほとんど中国語はしゃべれませんでした。数々の友達ができました。その人達といっしょに食事や歌を歌っていると本当に時間はあっという間に流れてしまいました。しかし、いざ別れるとなるとつらく、みんな僕達に、

「請写信、請写信。」(手紙を書いてください。) や、さかんに握手を求めました。本当に僕達は遠い中国という国で、こんなにもすばらしい友達ができたことを大変うれしく思います。

また、中国の建造物には本当にすばらしい物がいくつもありました。やはりその中でも特にすばらしかったのは、万里の長城ではないでしょうか。見渡すかぎりの山々に連なり、どこまでも続いているのです。この様な光景はまず日本では想像もできはしません。実際に登って歩いてみるとそれはよく分かりました。急な坂道に加え、どこまで歩いてもきりがありませんでした。あたりまえでしょうか。僕にとってはとてもいい経験になりました。

他にもいろいろな事がありました。例えていえば料理等もそのうちの一つです。ラーメンでも日本で食べているのとはまったくちがいで、まるでソバの様でした。他にも北京ダックや蛙等本場にいろいろなものを食べることができました。しかし、朝からでてくる油っこい料理はどうも苦手でした。

そして、列車から見える光景。地平線のずっと向こうまで見えた時は不思議な気分でした。まだまだ数限りなく色々な事がありました・・・。

僕はこの八日間とてもいい経験ができました。本当にあっという間に過ぎたという感じです。と同時に僕の世界観というものが、大きく変わったような気がします。旅行で手に入れるものがこんなにすばらしいとは、初めは思いもつきませんでした。何か機会があれば中国へ出かけたいと思います。

最後にこの旅行を通してお世話になった通訳の王さんに張さん。そして、乙武先生、中島先生、立道先生。やはりこの旅行を通してできた、松川君、鈴木さん、林さん、藤本君、石丸さん、中西君、片山さん、堀君、川西さん、平尾君、中村さん、坂田さん、溝内君、畑田さん、伊丹君、佐々木君、澤山さん、篠田さん、松下さんの十九人のすばらしい友人を一生忘れはしません。本当にどうもありがとう！



高松空港にて、
旅行最後の記念写真

八日間も中国へ行けたんだなあ、念願の海外へ。でも、いまだにその実感がわいてこないままに日が過ぎていくこのごろです。中でも私の心を一番強く打ったのは、南昌第二中学や第一職業学校の学生との交流会・歓迎会でした。



見渡す限り続く万里の長城

職業学校の門をくぐると同時に、拍手かっさいで、「いらっしやい。」「いらっしやい。」と言って出迎かえてくれたのです。通り道から階段からベランダから部屋の中から。こんなにすばらしい歓迎を受けたのは、初めてです。中国の人たちの心の暖かさを感じました。中国の人は、英語を習っているのじゃべれる人がたくさんいます。私も習ってはいるのですが、本当にごく簡単な言葉しかしゃべれません。しかし、なんとか心の通いをはかろうと工夫しました。単語をいろいろに並べてみたり紙に書いたり手ぶり身ぶりで。そうやって、自分の思いが相手に伝わった時の喜びは、今までにない格別なものでした。いっしょに日本の歌を歌った時、本当に一生懸命歌ってくれました。それに、とっても上手なのです。誰でもがんばると、異国の言葉がしゃべれるようになるんだな。別れの時、みんな涙を流しながら別れをおしました。もっと互いの心の奥深く入っていけるように、言語の違いを克服してまた会おうね。私は、そう思わずにはいられませんでした。

ところで、スーツケースの鍵を無くして、開かなくなるという大失敗もしました。しかし、そこでの友達の友情、親切を、とても嬉しく感じました。制服代わりに服を走り回ってそろえてくれたり、自分もこういうことはあったんだよ、と励ましてくれたり。今度は私がそう言ってあげられるのかな。若いうちは、失敗や苦勞を買ってでもしろ、とよく言われますが、そのとおりののだなあ。でもそれは同じ失敗を、二度と繰り返さないためにそうあるのだと思います。

貴重な中学二年生の春休み。ここで学んだことは、主に今まであげたような友情の輪です。これは、何にもかえがたいかけがえのないもの。それから、端から端まで歩いてみたいと思った万里の長城。太和殿の中にある皇帝専用の椅子に一度座ってみたいと思った故宮など。いずれにしても、実際にそこへ行けたんだ、という喜びでいっぱいでした。二度とないすばらしい思い出となりました。これも、いろいろな面でお世話になった先生方、市国際交流協会の方、中国の方々などのおかげです。これを機会に、たくさんの友をよりいっそう大切にしたいです。中国で新しくできた友達にも手紙を出したいと思います。日中友好の使命は、これからですから。

今、体は高松の自分の部屋だが、心は中国を旅行している。中国での8日間、過ごしてみると、なんと時間の短かったことか。せめて一ヵ月はかけて、中国のいろんなところに行きたかった。

誰がどう言おうと、とにかく中国は広い。とてつもなく広い。僕は海の地平線を見たことはあるが、陸の地平線を見たのは、生まれて14年、初めて見ることができた。そのすばらしさといったら言葉の表しようがないほどである。地平線のかなたにすいこまれそうな気がしてくる。まさに雄大である。としか言えない。あらためて日本のせせこましさを感じさせられた。

雄大といえば、万里の長城もすばらしかった。パノラマ写真に入りきらない。あんな長くてでかいものをどうやって作ったのだろうか。昔の中国人はえらいと思った。

主な観光地でのことは、他のみんなが絶対書くことなので、僕は中国でのみじかな生活体験を書くことにする。

中国に行ってびっくりしたのは、目線である。とても痛い。露骨に僕たちを興味深そうに見る。故宮では回りを囲まれてしまったほどである。そこで僕の秘密兵器、サングラスの登場である。これをかけると自分にも自信がわくし、中国の方もビビってこっちを見なくなるという作戦だ。しかし、この作戦は大失敗に終わった。もっとへんなものを見るような目つきでこっちを見るのだ。ウーン、どうしても勝てない。高松に帰って鏡にうつった自分の顔とにらめっこをしたほどだ。

もう一つびっくりしたのは、英語が話せる人がたくさんいたことだ。おかげで、少しは言葉が通じた。それと、中国の方に、日本語の歌を教えてくださいと言われた。僕らは紙に書いたりしていっしょけんめいに教えた。するとけっこう、上手に歌ってくれた。まだこの人たちとあく手をし1時間もたっていないのに、1日、ずっといっしょにいたような気がするほど楽しい時でした。

あと1つびっくりしたのは、道路の混雑である。人々があふれるように道を歩いている。歩道も車道も関係ない。運転手はクラクションのところに手をおいて運転している。中国で車の運転していると、とても上手になれると思った。

とにかく初めての異国の地は見るものがすべてがめずらしかった。

最後に、僕たちの面倒を見て下さった、乙武団長先生、中島先生、立道先生、国際交流協会の方、ほんとうにありがとうございました。この思い出は、死んでも忘れません。これからは、世界をまたにかけ人間になり、国際舞台で働いていきたいと思っています。

本当にお世話になりました。



異国の友達ことができました
(南昌二中)

ぼくは、この旅行でたくさんの方のことを学ばせていただきましたが、いやというほど感じさせられたことが一つあります。それは、ぼくの自覚のなさです。ぼくは事前研修会の際に進んで代表にもなりましたが、旅行の前になって自分の不注意で入院したり、また、前日になって足を脱臼したりしてみなさんにめいわくと心配ばかりをおかけしていました。それで副代表の伊丹君にめいわくをかけてしまい、とてもなまけなく、また自分の自覚のなさはずかしく思いました。ぼくは、この旅行では何一つとして代表らしいことはできてはいませんでした。



上海から南昌に行く
寝台列車の中で

ある人に「代表って伊丹やろ。」と言われたのがショックだったのですが、そう思われてもしかたがないと思いました。このことは一生胸にたたきこんでおいて将来社会人として働きだしても肝に命じておこうと思います。このことは、ぼく自身のよい収穫だったと思います。

旅行中は、中国で日本でもできなければならない礼儀ができていなかったことや、目上の人に対する言葉づかいなど、今から考えると、日本と中国の親善よりも、日本のレベルの低さをさらけ出してきたような気がしてなりません。文化の差というよりも、ぼくたちの文化の低さがよく分かりました。

これまでは旅行中の悪かったことを書きましたが、この旅行は良かったところもたくさんあります。まずこの旅行での第一の収穫は一生の友達ができたことです。この二十人はみんな一生の友達です。最初のころはみんなすこしかたくなっていて、みんなの本当の姿が分からなかったが、みんながとけ合ってから、すごく楽しい日々でした。そして、よい先生方とも出会いました。先生方には、たくさんめいわくをかけました。また恥もかかせてしまいました。しかし先生方は大海のような広い心でそれを受けとめてくださり、ぼくたちはただ反省するばかりです。そして中国での学校訪問のときの、あのすばらしい歓迎です。言葉では言いきれないほどすばらしかったです。たとえば言葉は通じなくとも、とてもすばらしい夜でした。ぼくは、生まれてはじめてあんなすばらしい歓迎をうけました。このことも、ぼくは一生忘れないでしょう。

先生方やみんなにめいわくをかけたこと、中島先生とホテルで語り合ったこと、そしてみんなと遊んだこと、あのすばらしい歓迎、すべてが忘れられない思い出、そして、これからの目標です。長いようで短かったこの八日間、春休みをふつうに過ごすよりもすごく価値がありました。このかけがいのない八日間で学んだことを日常の生活に生かし、自分をもっともっとすばらしいリーダーになって、国際社会の先頭に立って歩んでいきたいと思っています。そして、この機会を提供していただき、まことにありがとうございました。最後に、先生方もみんなも体に気をつけて、お元気で。また会う日まで・・・。

私は、今でも、あのいろんな人と過ごした8日間を忘れることができません。いや絶対に忘れることはできないと思います。

一、友 達

私は、最初、とても不安でした。研修会するとき、なんか、みんなとても静かで、引率の先生も、とても怖そうだったからです。でも、成田空港についたとき、その不安は、すぐなくなりました。話をしていると、みんな明るい人ばかりだったし、先生方もとてもいい人ばかりだったからです。(特に中島先生はおもしろい人だった。)

ホテルの中も、夜行列車の中も、ウノやカラオケや「うすのろまぬけ」をしてとてもおもしろかった。一日目は、「君」とか「さん」づけだったのにいつのまにかあだ名で呼びあっていた。もし、この時50人を越す人数で、中国へ行っていたら、こんなに楽しくはなかっただろうと思う。名前だっけ覚えきれないだろうし、みんなが、まとまらなかったと思う。

それから、中国人の友達もできたことを忘れてはいけない。向明中学では、授業中に訪問したため、友達ではできなかった。けれども校長先生の通訳をしてくれた遍さんと親しくなった。中国は、英語の他に、フランス語も学ぶ人たちがいるというのには、とてもおどろいた。遍さんの日本語は、とても上手だった。たった二年間でここまでうまくなるものだろうかと思議だった。職業学校の友達もみんないい人ばかりで、中でも、鄭洪さんと特に仲良くなりました。鄭さんは、私達が、南昌のホテルを出るとき、私に一枚のコインをくれました。とてもうれしかったです。鄭さんのやさしさは、一生、忘れることができないと思います。それと、職業学校のあの盛大なお出迎えも忘れられないし、二中のみんなが駅に見送りにきてくれたのもとてもうれしかったです。二中といえば、あの夕食会。いすとりゲームで、人を押しつけてまで勝った私に「万年筆」をくれたあの人も忘れられません。とにかく、中国で、とてもすばらしい友達がたくさんできたことをほこりに思いたいです。

二、建 造 物

やっぱり、一番心に残ったものは、万里の長城です。のぼったりするのがあんなにつかれるとは思わなかったです。だけど、おりる方がとぉっても怖かったです。最初にみたとき、あの建物の偉大さに圧倒されてしまいました。古代の人々は、機械を使わずにどうやって建てたのだろうと思議にも思いました。

三、決 意

私は、この貴重な8日間の体験も生かして、これからの生活に役立てて生きたいです。



雄大な万里の長城の中で

大きなスーツケースを引きずり、南昌駅のプラットフォームの雑踏をかきわけるようにして用意してくれたバスに乗り込んだ。ついに南昌市に来たんだと、窓の外を眺めながら実感する。

まずは南昌市人民政府を訪問。私は少し緊張していたが、優しい方ばかりですぐに落ちつくことができた。自己紹介の時、市長さんと目が合った。にっこりと微笑んでくれ、私はなんともうれしくなって微笑みかえした。

その後、南昌市第一職業中学を訪問した。中学の門の前でバスから降りると、大歓声が起こり、手に花房をもった生徒達が道を飾ってくれた。校舎をみるとどの窓からも生徒が顔をだしている。手を振るとワーッと声が起こり笑顔で手を振り返してくれる。そんな学校全体での歓迎に私は改めて来てよかったと思った。服飾専門校ならではの授業やファッションショーを見学し、夜には夕食会が催された。この夕食会もまた素敵なおもてなしで日本と中国の歌を交換したり、互いに言葉を教えあったり、交流という言葉がぴったりの楽しいひとときだった。

翌日には南昌第二中学の人々と出会った。交流の場では中国の友人が書をプレゼントしてくれ、またかたことの英語で話し合ったり、名刺を交換したりもした。夜の歓迎会では互いに本当にリラックスしてとても楽しい交流をした。ホテルに戻る時、中国の友人のひとりにペンをプレゼントすると、「僕もなにか…。」とキーホルダーをくれた。

南昌を去る時、職業学校の生徒が駅まで送りにきてくれた。「謝謝。」「請写信。」「再見。」と覚えてた中国語を何度も何度も繰り返して、固く手を握り合った。列車が発車した後はどうにも寂しくて、南昌での二日間を思いだして涙がとまらなかった。そして、いつか再び南昌をおとずれたい、もう一度友人たちに会いたいと思った。

今、手元に二通のエア・メールがある。どちらも南昌で知りあった友人からのものだ。たった二日間だったが私たちは昔からの友達のように仲良くなった。「永遠に友情を続けましょう！」と手紙に書かれていたが、私の答えは「もちろん！」だ。そう、私たちは中国の言い伝えにある「三千里はなれていても会える」友達なのだ。

世界という大きな視野で見ると、私たちの交流は小さいものかもしれない。しかし、平和な国際関係を本当に支えていくのはこういった小さな交流ではないかと思う。今回の訪中で私は多くのものを得た。それは文化や習慣を越えた心の交流が生んだ一生の宝物である。

このすばらしい経験をもとに、よりよい国際社会をつくれるよう、未来に向かって新しい一歩を踏みだしたい。



南昌二中の生徒さんと

一九九二年、三月二十七日から四月三日。私にとって一生忘れられない貴重な体験をしました。初めての海外、自分が中国へ行けると分かった時私は心に決意したのです。“一日一日をくいのないようにしっかりと見て学び同時に中国の生徒と友情をつくろう”私はこの目標をめざし一分一秒大切にしました。

この訪中で特に三つのことを感じました。まず第一に中国の中学生が力の限り努力することです。向明中学では私と同年のある学生を紹介してもらいました。愛敬ある顔をしたその彼女に何ができるんだろう、と



南昌二中との交歓会にて

いたら突然すまして日本語で話し出したのです。私はビックリしました。まさか日本語をしゃべり出すなんて思ってもみなかったからです。彼女は何に取り組むのも一生懸命に最後までやりとげます。勉強だけではありません。すべてのものです。そして訪問の中で第一職業学校を訪れた時にもそれは感じました。洋裁を専門とした学校だから毎日大量の洋服を作ります。その姿は真剣で、彼女達の額から流れてゆく汗を見た時、「自分ってなんて恥かしい…」と思いました。

次に私が熱く感じたのは中国人の心です。広大な国土を持っている中国はまるでどこまでも続く海のような感じでした。そのように中国人の心も大陸のように広くて相手を思いはかってくれます。そのうえ、温かい心なのです。今の私にはその心がかけています。自分さえといった考えが強く、相手までいきとどかないのが現在の自分だと思えます。もっと相手の気持ちをくんだ行動をとれるように心がけたいです。

最後に私は、今の彼女達の姿を作ったのは何であるかを考えさせられました。思いだせば中国には天安門事件といった政治に反対する学生デモがありました。戦後の日本も政治のやり方に反対運動をした学生がいました。そして徐々に日本は発展していったのです。現在日本はこんなにも発展した国はないと思われるほどすばらしい発展をとげた先進国となっています。中国はこれからの国です。あんなに大陸の大きい中国だから栄えると最も進んだ国となるでしょう。そして豊かな生活となり科学技術ももっと発展するでしょう。中国人の懸命さや優しい心が生まれるのはこのような天安門事件といった一つのきっかけからでしょうか。

今回の訪問で自分が決意していた目標は果たせたでしょうか。私なりに、八日間、一日一日を大事に国際交流をし友情をつくれたと思っています。私は中国へ行って初めて心の豊かさを勉強したように思います。その心には大切な要素がたくさん含まれています。これから私はこの中国人から学んだ心、努力、熱意を大切に、もう一度見つめなおしたいです。そしてそこから、学校生活や家庭生活、自分自身を磨くためにも役立てて何でも積極的に参加し、寛容性や創造性、自主性を育てていきたいと思っています。

